中世物語『あきぎり』の引歌表現
――コンピュータによる文字列一致検索の結果をふまえて――

安　道　百合子

要　旨

中世物語『あきぎり』について、コンピュータによる引歌表現検索の結果、および物語本文相互比較の結果を報告し、本作品の引歌表現を網羅的に整理した。あわせてこの方法の有効性についても報告した。新たな引歌指摘は多くないが、慣用的表現となり得ているか否かの見極めに資するデータを掲出することができ、表現の傾向をたどるには有効な方法である。『あきぎり』の場合は南北朝期の和歌までを視野に入れて成立を考えるべきであろう。

キーワード：中世王朝物語、あきぎり、引歌、コンピュータ国文学、文字列一致検索

はじめに

本稿は、さきに発表した「コンピュータは引用表現を探せるか―中世物語『あきぎり』における類歌検索および引用表現検索の試みを通して―」(注1)の続稿である。ある作品が生み出されるとき、作者の意図の如何にかかわらず、それ以前の作品の影響を受けることになる、そうした影響をコンピュータを使って探すことは可能か、ということを考え試みた報告の一端であった。物語内和歌の類歌については網羅的に報告したが、引歌表現検索の結果、および物語本文相互比較の結果については、不十分であった。このたびは、特に引歌表現を中心に、先行研究指摘も踏まえて整理しておくとともに、コンピュータにできることとその有効性についても報告したい。方法は前と同様、連続する文字列の一致の度合いをはかる方法である(注2)。

そもそも、文学研究において作品の特性を論じることと、コンピュータによる文字列解析の手法を用いつつ作品の特性をみていくこととは、おのずからその性格に違いがあるように思われる。ある作品の表現の細部にまで目をこらすことと、広く浅く大量のデータをプログラム処理してある程度の傾向をつかむこと、と言い換えればよかろうか。コンピュータには作品を読むことはできない。成立年代や作者圏の個性などに由来するデータの特性を踏まえて結果を出すことはないが、逆に、人の目の偏りや思い込みを排除することができる。ありふれた表現と思っている

ものや、これは『源氏物語』の影響だと思い込んでいるような用例などを、一旦、等価のものとして並べ検討することができるという利点がある。引歌表現の場合、どの歌を引用しているかと見定めることは、作品の成立年代に関わることでもあり、できるだけ古い年代の和歌を提示しがちである。しかし、たった一首の古い歌と、複数の同時代和歌とが並べられたとき、本当にその作品に影響を与えたのはどちらと考えるべきなのだろうか。網羅的に抽出された結果だからこそ、見えるものがあると思う。

このたびの比較に際し、使用したデータは次のごとくである。

（イ）和歌については「新編国歌大観」に収められる範囲の和歌について、データを作成した。歌については、できるだけかな表記に改めた。

（ロ）『あきぎり』本文は「鎌倉時代物語集成」(注3)の本文を入力した。漢字は「御」「給」のみを残し、それ以外は、かな表記・清音に統一、踊り字も当該のかなに改めた。網羅的に短文を取り出すため、20文字ずつずらして、40文字の文字列を取り出した。

（ハ）『源氏物語』本文は、国文学研究資料館データベース、古典コレクション『源氏物語（絵入）』CD-ROMに収められているテキストデータのうち、標準領域の本文（全かな、歴史的仮名遣い、清音、異文情報あり）を使用し、同様に40文字の文字列を取り出した。

（ニ）『狭衣物語』本文は、国文学研究資料館のホームページで公開されている日本古典文学大系（岩波書店）の本文を使用した。できるだけ、かな表記、清音にととのえ、同様に40文字の文字列を取り出した。

なお、『あきぎり』本文を稿中に引用する場合は、読みやすさを考慮して、「中世王朝物語全集」(注4)より引用した。

一、引歌表現検索の結果

引歌表現というのは、物語本文や作中人物の発する言葉に、有名和歌の一部を意図的に織り込むことにより、和歌に詠みこまれた世界を想起させ、いま描き出そうとしている世界に、より説得力をもたせようとしたものである。読者が引用に気づき、その和歌世界を想起することが前提であるから、物語が創られた当初は、さがすまでもなくすぐに思い浮かべられる和歌であったはずである。言わずもがなの心情を和歌の一節に担わせている場合もあるし、和歌の相乗効果によってその場面の具象性を高める場合もある。厳密に引歌表現という場合は、歌句の一部を引用の格助詞「と」などで受けて、明らかにある歌を引いていることを示している場合であろうが、ここでは、もう少しゆるやかに和歌的表現の範疇に収まるものを広く俎上に載せることとしたい。

さて、既に、前稿で示したとおり、3音を一因子として8ポイント以上のときに、精度の高い

結果が導き出せた。いま、全体をとらえるために、先行研究での成果も含めて一覧にしたのが、次の表Ｉである(注5)。

結論からいえば、明らかに引歌と認定できるものに関しては、先学の研究成果にいくらも加えることができなかった。その意味では、コンピュータによって、引歌表現を網羅的に抽出することはできなかったということになる。しかも、一句5音のみの引歌は、この方法では到底抽出不可能である。

しかし、コンピュータによる結果で有効だと思われるのは、「コ」の列に○印を伏したような例であり、表Ⅱに掲げるような検索結果のデータそのものである。

3音一致の8ポイント以上の歌を検索させた結果はこの表のような形式にしてある。左列から用例番号、『あきぎり』の頁数、本文40文字、3音一致のポイント数、歌集名、歌番号、和歌と並び、和歌には一致する3音を見つけるごとに一文字目と二文字目との間に入れられたスラッシュ記号がある。スラッシュが続くところは一致する歌句の部分ということになる。すべての結果をここに掲げることはできないため、注目したい結果のみを掲げた。

用例7（表Ｉの用例番号38、95）には「しのぶもぢずり」という歌句を含む部分である。当然、『古今和歌集』や『伊勢物語』で有名な「みちのくのしのぶもぢずりたれゆゑにみだれむと思ふ我ならなくに」（『古今』724）という歌が思い浮かぶところだが、ここには掲出されない。頼輔集54番歌「きみゆゑにおもひみだるとしらせばや心のうちにしのぶもぢずり」、親盛集82番歌「いはぬまはおもひみだれてすぐすかなこころのうちのしのぶもぢずり」のように、「こころのうち」に「しのぶもぢずり」があるという言葉続きであり、これは『あきぎり』本文の「心のうちはしのぶもぢずり」により近い。ほかの歌も「こころのうち」と「しのぶもぢずり」の両方を持つ歌が掲出された。いずれも、『古今集』歌を本歌として詠まれたものであり、「しのぶもぢずり」に託された恋する気持ちの乱れが「こころのうち」のものであることを、あえて示した歌である。

同様に用例11（表Ｉ－53）「ちちのやしろをひきかけて」、用例14（同67）「をばながもとのおもひくさ」、用例29（同126）「ひとのとふまてなりにける」にも同様のことが言える。いずれも万葉や平安中期以前の古い歌がまず思い浮かべられる。先学の引歌指摘もそれらを指摘する。誰しも、そのあまりに有名な歌を思い起こさずにはいられないだろう。ただし、物語中にあらわれる言葉続きと同じ歌句は、中世以降の本歌取り詠のなかに複数あらわれるものである。さらに、「ちちのやしろをひきかけて」の場合は、これが『源氏物語』本文にも同じ形であらわれることに注目できる。引歌表現が、先行物語の章句を介して一種の慣用句のようになっていると解される例であろう。

表Ⅰ

番号	頁	あきぎり本文	「と」	福田注	妹尾注	コ	出典	和歌
		上巻						
1	11	我が通ひ路の関守は据ゑぬにやと心やすくて		2	○	●	古今632	ひとしれぬわがかよひぢの関守はよひよひごとにうちもねななん
2	13	「寝ぬ夜はなくて」などうちながめて	○	5？	未		催馬楽	貫河の　瀬々の柔ら手枕　柔らかに　寝る夜はなくて　親放くる夫（以下略）
3	15	かつは恨みつ、慰め契り給へど		6			嘉元百首875	かつは恋ひかつは恨みて身ひとつに千たび心のかはるころかな
4	15	「逢ふ人から」とかや聞きしも	○	7	○		古今636	ながしとも思ひぞはてぬ昔より逢ふ人からの秋のよなれば
5	15	「人見ぬ先に」とうち嘆けば	○					
6	15	げに岩木もなびきぬべき御ありさまなり		8			源氏物語夕霧	
7	16	身を去らぬ心地して恋しきにも		11参考			南朝五百番歌合884	身を去らぬ面かげばかりとめおきて我をばなにをふるしはつらん
				11参考			風葉830	身を去らぬみしおもかげのなかりせばなににかくべき命ならまし
8	16	いつ習ひける恋の心ぞやなど	○	12	○		後撰603	わが心いつならひてか見ぬ人を思ひやりつつこひしかるらん
				12参考		●	拾玉5493	いかにこはひまなく人の恋しきはいつならひけるわが心ぞも
					？		続古今944	きみによりおもひならひぬよのなかの人はこれをやこひといふらむ
9	17	知らぬ昔は	○	14参考	○参考		拾遺愚草1599	あまの戸のあくる日ごとにしのぶとてしらぬむかしはたちもかへらず
10	17	なべて憂き世と浮き立ちて	○	15	未		百首歌合建長八年710	いづかたへやらば心はなぐさまんなべてうき世の秋の夕暮
11	19	枕の下のきりぎりすは「我のみ」と鳴き出でたるに		16参考			続千載528	ゆふさればよもぎがねやのきりぎりす枕の下に声ぞきこゆる
				16参考	○		千載329	秋のよのあはれはたれもしるものをわれのみとなくきりぎりすかな
12	20	露は霜かと紛ふにも、小笹が原を		17			六百番467	しもむすぶあきのすゑばのをささはら風には露のこぼれしものを
13	20	「これや契りの」など	○	19未	未			
14	22	小夜千鳥の妻恋ひわぶるも		20			夫木11888	しきしまのなかのみなとのさよちどりつまよびたててうらづたひゆく
15	22	貫之が「妹がり行けば」と詠みけんも	○	21	○☆		貫之339	思ひかねいもがりゆけば冬の夜の河風さむみちどりなくなり
16	22	人めも草もかれのみまさりて		22	○☆	●	古今315	山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へば
17	22	「こざらましかば」と、うち語らひ給ひて	○	23参考			宇津保849	君をまつわがごとわれを思ひせばいままでここにこざらましやは
					未☆			
18	23	限りあらん道		24			源氏物語桐壺	
19	24	まことの道の障り				○	安撰407	よしなしやただいつはりのことのははまことの道のさはりなりけり
20	25	消えなん後		25参考			続千載1105	しらせばや消えなん後のけぶりにもたちそふばかりおもふ心を
				25参考			赤染40	有りてだにおぼつかなきはあるものをきえなん後の世はいかがせむ
21	27	鳥部野の草とも、さこそ思し嘆くらめと	○	26未				
					未参考		朗詠百首89	ふる里をなほ恋しとやおもふらんそなたへなびくとりべのの草
22	27	御涙は枕も床も浮くばかりにてぞおはします		28	○	●	新葉767	涙川枕もとこもうくものを身はいかなればしづみはつらん
23	28	明日知らぬ身と思はば		29			古今838	あすしらぬわが身とおもへどくれぬまのけふは人こそかなしかりけれ
				29			続拾遺1316	あすしらぬわが身のうさはおどろかであはれをよそにきくぞはかなき
24	29	亡き人の影だに見えぬ宿なれど		30		●	後撰1402	亡き人の影だに見えぬ遣り水のそこは涙に流してぞ来し
25	30	水草居にけるにや		32			新古今1239	たえぬるかかげだに見えばとふべきをかたみの水はみくさゐにけり
26	31	げに昨日今日と思ふほどに		34	○		古今861	つひに行く道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを
27	31	いまはおもはじなどつらくおぼし入たる人も			未			
28	32	「これやわかれの」と		36参考	未参考		祐子内親王家紀伊18	つねよりもはぎのあさつゆしげきかなこれやわかれのなみだなるらむ
					未参考		頓阿句題百首295	逢ふまでの後の命もたのまねばこれやわかれのかぎりなるらん
29	33	空もいかがと、常ははづかしく			○		新古今842	たれもみな涙の雨にせきかねぬ空もいかがはつれなかるべき
30	33	身をうの花の雪か波かと			未参考	●	六帖2188	神やまの身をうのはなのほととぎすくやしくやしとねをのみぞなく
					未参考		六帖1257	かくちのやかたなのやまのかたきしに雪か花かと浪ぞよせくる
31	33	時鳥のおとづるるにも、誰を偲びてなど			未			
32		あるゆふぐれのことごとしきほどに			○		新勅撰881	ゆふさればみちたどたどし月まちてかへれわがせこそのまにも見む
				38参考			基俊65	誰ゆゑに迷ひそめにし心ぞもことわりしらぬいなぶちの滝
33	34	稲淵の滝は騒ぎまさりて		38参考			夫木12324	はやくより水のみなかみふかめつついなせもみえずいなぶちの滝
					未☆			
34	34	見えぬ山路のみこそよからめ		39	○		古今955	よのうきめ見えぬ山ぢへいらむにはおもふ人こそほだしなりけれ
35	34	袖のそよめく		40			貫之684	立よれば袖にそよめく風の音にちかくはきけどあひもみぬかな
36	34	やまなしとのみ	○	41	○		古今六帖4268	よのなかをうしといひてもいづこにか身をばかくさん山なしの花

番号	頁	あきぎり本文	「と」	福田注	妹尾注	コ	出典	和歌
37	34	浮かれん魂は、必ず漂ふばかりなりとぞうち泣かるる	○					
38	35	忍ぶもぢずりと、苦しく思し乱るる	○	43	○		古今724	みちのくのしのぶもぢずりたれゆゑにみだれむと思ふ我ならなくに
				44			新後撰1077	あひみしは一夜の夢の草まくらむすぶもかりの契りなりけり
39	36	草の枕の一夜ばかりも				○	柏玉1812	いかにして草の枕の一夜には万の事を夢にみつらん
				45	○		拾遺967	しほみてば入りぬるいその草なれや見らくすくなくこふらくのおほき
40	36	入りぬる磯の嘆きひまなく				○	為忠家後度百首593	そでのうらはかかるなみだにくちぬべしいりぬるいそのなげきするまに
						○	延文百首1326	代代をへし昔の跡をつたへても匂ひすくなき軒のたち花
41	36	昔の光源氏の後を伝えても						
42	36	山の彼方へのみ心をかけ給へれば		46	○		古今950	みよしのの山のあなたにやどもがな世のうき時のかくれがにせむ
43	36	人やりならぬ思ひ				○	六百番歌合611	こひそむるこころのそこをたづぬればひとやりならぬおもひなりけり
44	37	寝ぬに明けぬと言ひけん人の心も		47	○		和漢朗詠153	なつのよをねぬにあけぬといひおきしひとはものをやおもはざりけむ
45	39	「たつをだまきの」と、口ずさみ給ひても	○	50	☆		狭衣77	谷ふかくたつをだまきは我なれや思ふ心の朽ちてやみぬる
					○		僻案抄	おく山にたつをだまきのゆふだすきかけておもはぬ時のまぞなき
46	40	とをちの里に立つ煙、かすかにたなびきて		51	○参考		夫木3386	雲かかるとをちの里の蚊遣火はけぶりたつともみえぬなりけり
				51			六百番946	いかにすむとをちのさとのけぶりだになどわがかたへなびかざるらん
47	43	見まくほしさにはいざなはれつつ		55	○	●	古今620	いたづらに行きてはきぬるものゆゑに見まくほしさにいざなはれつつ
				56			源氏物語総角	
48	43	遠山鳥のさてのみやむべきにこそ		56	○☆		後撰679	逢ふ事はとほ山どりのかり衣きてはかひなきねをのみぞなく
					○		六帖923	雲のゐるとほ山鳥のよそにてもありとしきけばわびつつぞぬる
				56参考			新古今1415	雲ゐよりとほ山鳥のなきてゆくこゑほのかなるこひもするかな
49	43	この世ばかり		57	未参考		千載925	きみこふる心のやみをわびつつは此世ばかりとおもはましかば
				57参考			拾遺愚488	身の果てをこの世ばかりとおりてだにはかなかるべき野べの煙を
				58		●	源氏4	いとどしく虫の音しげき浅茅生に露おきそふる雲の上人
50	43	虫の音しげき浅茅原		58	○		後拾遺270	ふるさとはあさぢがはらとあれはてて夜すがら虫のねをのみぞなく
				58	○	●	狭衣100	古里は浅茅が原に荒れはてて虫の音しげき秋にやあらまし
51	44	「まことに長き夜」と口ずさみ給ふ御さまぞ	○	60			和漢朗詠	八月九日正に長き夜、千声万声了む時なし
					未参考		源氏3	鈴虫の声のかぎりを尽しても長き夜あかずふる涙かな
52	46	つらき人ゆへと			未参考		新千載1640	よしさらばつらき人ゆゑくたしてん身をうらみてもぬれぬ袖かな
				63	未		源氏物語総角	
53	46	千々の社を引きかけて契り給ひしことも		63			実方55	いさやまだちぢのやしろもしらねどもこやそなるらんすくなみのかみ
						○	耕雲千首658	いざさらばちぢの社を引きかけてたのむばかりに人をうらみん
54	46	これも長き形見にやと…今は仇なれば、これなくは		66	○	●	古今746	かたみこそ今はあたなれこれはくはわするる時もあらましものを
55	49	見えぬ山路		69	○			
56	49	とぶらひ顔		71			風葉1205	よもすがらおもふ心をしりがほにとぶらふむしのこゑぞかなしき
57	49	虫の音も、弱り果て		72			玉葉2321	虫のねのよわるのみかは過ぐる秋ををしむ我が身ぞまづ消えぬべき
58	49	我が身はいつかとながめ暮らし	○		未			
59	49	吹きまはしたる木枯らしは、恋のつまなる心地して		73	○		狭衣41	夕暮の露吹き結ぶ木枯や身にしむ秋の恋のつまなる
				75	○		和漢朗詠144	壁に背ける灯は宿を経たる焔を残せり
60	49	壁に背ける灯火				○	宝物集199	物おもへばかべにそむけるともし火のきえかへりてぞあかしかねつる
61	51	昔の草の縁も		76			拾遺360	むらさきの色にはさくなむさしのの草のゆかりと人もこそ見れ
62	53	憂きは憂からず		77未				
					未参考		西行397	世の中のうきもうからず思ひとけばあさぢにむすぶ露の白玉
63	54	いかがとどめし忘れ形見ぞ		79未				
64	54	よその袂		80参考	○		続後撰1251	ふぢ衣よそのたもとと見しものをおのがなみだをながしつるかな
				80参考	○		栄花75	君まさぬ宿に住むらん人よりもよその袂は乾くよもなし
65	55	ありのすさび		81	○		源氏釈1	あるときはありのすさみにくかりきなくてぞ人はこひしかりける
				81	○		古今六帖2805	あるときはありのすさびにかたらはでこひしきものとわかれてぞしる
66	55	憂き名隠さん		82	○		狭衣54	吹き払ふ四方の木枯心あらばうき名を隠す雲もあらせよ
67	55	尾花が下の思ひ草		84	○	●	万葉2274	道の辺の尾花が下の思ひ草今さらさらに何か思はむ
68	55	誰をしのびて		85未	未			

番号	頁	あきぎり本文	「と」	福田注	妹尾注	コ	出典	和歌
69	56	「思へば水の下にありけり」とながめ給ひけん染殿の御心	○	86	○	●	伊勢物語59	我ばかりもの思ふ人は又もあらじと思へば水の下にもありけり
70	58	胸に焚く藻の煙立ちまさりて		87	○		後拾遺706	うらかぜになびきにけりなさとのあまのたくものけぶり心よわさは
71	58	かけても人は諸葛、思し寄らぬものゆゑ		88			新古今1778	見ればまづいとど涙ぞもろかづらいかに契りてかけ離れけん
					○		続千載1054	我ばかりおもふもくるし玉かづらかけても人はしらじものゆゑ
72	58	「いかにしのぶの」と、うちながめ給ひても	○	89参考	未参考		新葉678	はてはまたいかにしのぶのすり衣いまだにかかる露のみだれを
				89参考			浜松中納言物語74	さらでだに花橘は身にしむにいかにしのびの音さへなかれん
73	58	関の玉水、流れあふこともあるまじきにや		90参考			千載集686	おつれどものきにしられぬ玉水は恋のながめのしづくなりけり
					未☆			
74	58	生ける世の思ひ草は		91			新勅撰774	ひとしれぬうき身にしげきおもひぐさおもへばきみぞたねはまきける
75	58	立ちかはる春の気色も、いと悲し。四方の山辺霞みわたりて				○	讃岐守顕季家歌合1	たちかはる春のしるしにみるものはよもの山べのかすみなりけり
						○	風に紅葉89	たちかはる春のけしきもかひなきは君をへだつるかすみなりけり
76	61	古の衾の例、留まる枕だになければ		94			源氏物語葵	
					○		狭衣83	塵つもる古き枕を形見にて見るも悲しき床の上かな
77	62	「たねまきて人もたづねぬ」など		98	○		狭衣57	雲居まで生ひのぼらなん種まきし人も尋ねぬ峰の若松
				98	○		石清水13	たねまきし人も尋ねぬ姫こ松おひ行く末ぞ誰かみるべき
下巻								
78	76	「室の八島の煙ならでは」とのみ思し焦がるるぞ、	○	2	○☆	●	詞花188	いかでかはおもひありとはしらすべきむろのやしまのけぶりならでは
				2			狭衣16	いかばかり思ひこがれて年経やと室の八島の煙にも問へ
79	76	「憂きはためしも」と思し嘆くに、	○	3	○		狭衣95	夢かとよ見しにも似たるつらさかな憂きは例もあらじと思ふに
				3	○		続古今1299	あはざりしむかしをいまにくらべてぞうきはためしもありとしらるる
80	77	見えぬ山路とのみ思ひしに	○	4	○		古今955	よのうきめ見えぬ山ぢへいらむにはおもふ人こそほだしなりけれ
81	77	露の命の消えやらで				○	続拾遺1290	けふまでに露の命のきえやらで御法の花とみるぞかひなき
82	77	見もせず見えぬ所ならば		5			古今476	見ずもあらず見もせぬ人のこひしくはあやなくけふやながめくらさむ
83	77	忘れ草も生ひぬべきに何に忍ぶの明け暮れ		6			続古今1262	忘れ草生ふる野べとは見るらめどこは忍ぶなり後も頼まん
				6参考	○		後撰1187	結びおきしかたみのこだになかりせば何に忍ぶの草をつまましし
				7	○		古今484	夕暮れは雲のはたてに物ぞ思ふあまつそらなる人をこふとて
84	78	雲のはたてのもの思はしさは		7		●	秋篠月清1430	ゆふぐれのくものはたてのそらにのみうきて物おもふはてを知らばや
85	78	夢と知りせば		8	○		古今552	思ひつつぬればや人の見えつらむ夢としりせばさめざらましを
86	79	涙に洗はれにけりと見ゆるに				○	他阿上人638	恋すてふ心の内はしのぶにもたへぬ涙にあらはれにけり
87	80	逢ふにし変へばと、かかることにや。惜しからぬ身を		9	○		古今615	いのちやはなにぞはつゆのあだ物をあふにしかへばをしからなくに
				11	○☆		拾遺876	涙河おつるみなかみはやければせきぞかねつるそでのしがらみ
88	80	袖のしがらみ堰きかね		11参考			拾遺愚員外241	みづぐきのはかなきことをしるべにてけふせきかぬる袖のしがらみ
						○	新千載1082	涙河袖のしがらみせきかねてやどれる月も影ぞながるる
89	81	人知れず思ふ心は夢にも御覧じけんものを		12参考			落窪物語27	人知れず思ふ心もいかでさは露とはかなく消えぬべきかな
				12参考		●	続古今979	人しれずおもふこころはあきはぎのしたばのいろにいでぬべきかな
90	81	谷の埋もれ木と朽ち果てなんも	○	13	○		千載651	思へどもいはでの山に年をへてくちやはてなん谷の埋れ木
				14			新勅撰1017	ながれてのなにこそありけれあたり河あふせありやとたのみけるかな
91	81	あらば逢ふ瀬の末も頼まれしを			○		拾遺646	いかにしてしばしわすれんいのちだにあらばあふよのありもこそすれ
					○	●	続千載1202	たえぬべき命を恋の恨にてあらばあふ世の末もたのまず
92	81	身はいたづらになりぬとも		15		●	拾遺950	あなれともいふべきひとはおもほえで身のいたづらになりぬべきかな
93	81	「小野の篠原」と	○	16	○☆		後撰577	あさぢふのをののしの原忍ぶれどあまりてなどか人のこひしき
					○☆		古今505	あさぢふらめやいふ人なしに
94	83	名にし負ふ春の夜なれど、		17			千載964	春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなく立たむ名こそをしけれ
95	83	心のうちは「しのぶもぢずり」と見えたり	○	18	○		古今724	みちのくのしのぶもぢずりたれゆゑにみだれむと思ふ我ならなくに
						○	頼輔集54	きみゆゑにおもひみだるとしらせばや心のうちにしのぶもぢずり
96	84	いにしへさえ、とりかへさまほしく			○		源氏釈268	とりかへすものにもがなやいにしへをありしながらのわが身と思はん
97	85	月日に添へて		21参考			新後拾遺1254	つもり行くうらみもかひぞなかりける月日にそへてつらき契りに
				22参考			続千載2058	かなしさの月日にそへていまよりはわが身一つにとまるべきかな
98	86	我が身一つに		22参考			古今193	月みれば千々にものこそ悲しけれわが身ひとつの秋にはあらねど

番号	頁	あきぎり本文	「と」	福田注	妹尾注	コ	出典	和歌
99	87	さだかなりし夢のしるべ		26参考			古今六帖647	むばたまのやみのうつつはさだかなるゆめにいくらもまさらざりけり
				26参考			続拾遺939	さだかなる夢とやなほもたのまましやみのうつつのゆくへしらねば
100	90	うつせみの		29	○		万葉2972	空蝉のうつし心もわれはなし妹をあひ見で年のへゆけば
							源氏25	空蝉の葉におく露の木がくれてしのびしのびにぬるる袖かな
101	90	憂かりける身の契りはいかなる前の世の報ひなりけん				○	秋篠月清694	さきのよのむくいのほどのかなしきを見るにつけてもつみやそふらむ
						○	嘉元百首862	うかりける身の契かな人しれずおもふ心のさのみむなしき
102	90	いかなるいわほのなかなりとも			○		古今952	いかならむ巌の中にすまばかは世のうき事のきこえこざらむ
103	91	思ふ心にいざなはれつつ			○		古今620	いたづらに行きてはきぬるものゆゑに見まくほしさにいざなはれつつ
104	91	「何に昔をしのぶ」など思せども	○	32参考	○		続千載1718	たち花のはなもにほはぬ宿ならばなににむかしをおもひ出でまし
				32参考			新後撰201	われならで昔をしのぶ人やあると花橘に事やとはまし
105	92	憂きに絶えせぬ			未参考		奥儀抄197	思ひいでてとふ言の葉をたれみましうきにたへせぬいのちなりせば
106	93	忍ぶの乱れ、苦しきほどなり			○		新古今994	かすがののわかむらさきのすり衣しのぶのみだれかぎりしられず
107	96	人の心の頼みがたき		36参考			古今六帖2194～2233	下二句人の心をいかがたのまん
108	96	袖のうちにや		37？			古今992	飽かざりし袖のなかにや入りにけむわが魂のなき心地する
109	97	心は野にも山にも		39	○		古今947	いづこにか世をばいとはむ心こそ野にも山にもまどふべらなれ
				39参考			赤染衛門378	心こそ野にも山にもあくがれめ花につけては思ひ出よかし
110	98	影だに今はとおぼえしかども			未			
111	98	ただ藻に棲む虫のわれからとのみ悲しく	○	42	○	●	古今806	あまのかる藻に住む虫のわれからとねをこそ泣かめ世をばうらみじ
112	99	及びなき雲の掛け橋				○	小夜衣65	およびなき雲のかけはしふみみねど涙うき木に袖くちにけり
113	99	嘆きの枝の繁きさまなどを		43参考			玉葉2409	君こふるなげきのしげき山郷はただひぐらしぞともになきける
					未参考		蜻蛉日記261	わがおもふ人はたそとはみなせどもなげきのえだにやすまらぬかな
114	99	げに魂も憧るるにや	○		○		後拾遺1162	ものおもへばさはのほたるをわがみよりあくがれにけるたまかとぞみる
115	100	涙の水上は、堰き止むる人もなきにや		44			千載667	人知れぬ涙の川のみなかみやいはでの山の谷のした水
116	101	絶え果てにしあまの刈藻の心づきなさ			○☆		古今806	あまのかる藻に住む虫のわれからとねをこそ泣かめ世をばうらみじ
117	102	もの思ひの花のみ咲きまさりて		49	○		古今六帖2192	草も木も吹けばかれゆく秋風に咲きのみまさるもの思ひの花
118	103	身は木枯らしとのみ思し惚れて	○	50	○		新古今1320	きえわびぬうつろふ人の秋の色に身を木枯らしの杜の下露
119	103	涙の露は袖よりほかに置きわたす		52	○☆		後撰1281	我ならぬ草葉ものは思ひけり袖より外に置ける白露
120	104	「浮き雲しげき」とのたまひし		54				作中歌(あきぎり6)をふまえる
121	104	いかに結びし中の緒ぞ		55			源氏236	逢ふまでのかたみに契る中の緒の調べはことに変らざらなむ
122	105	何となく		58参考			新続古今1967	なにとなく過ぎこしかたぞあはれなるむかしもおなじ夢の世なれど
123	105	限りあらん道のほだしともなりぬべく		59参考			千載484	限りあらむ道こそあらめこの世にて別るべしとは思はざりしを
124	105	互ひに袖を絞りつつ		60	○		後拾遺770	契りきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山波越さじとは
125	106	唐土の吉野の山を夢ならでとありとも	○	61	○	●	古今1049	もろこしの吉野の山にこもるとも後れむと思ふ我ならなくに
				62	○☆		拾遺622	忍ぶれど色に出でにけりわが恋は物や思ふと人の問ふまで
126	107	人の問ふまでなりにけるを				○	続後拾遺687	いまははや人のとふまで成りにけり思ふあまりの夕暮の空
127	108	岩にも松は生ふる例、なくやある		63	○☆		古今512	種しあれば岩にも松は生ひにけり恋をしこひば逢はざらめやは
128	108	おのづからあらば逢ふ瀬も、松に			○	●	新古今1145	あすしらぬ命をぞおもふおのづからあらばあふよをまつにつけても
129	108	松に心をかけ給へかし		64			拾遺458	わたつみの浪にもぬれぬ浮島の松に心をよせてたのまん
130	108	誰も千年の松ならぬ身は		65	○	●	古今六帖2096	うくもよに思ふ心にかなはぬか誰も千年の松ならなくに
				66			新拾遺912	空蝉はむなしきからも残りけり消えて跡なきあさがほの露
131	109	朝顔の花の露、日影待たぬほどにて			未参考		新勅撰821	我ならでしたひもとくなあさがほのゆふかげまたぬ花にはありとも
						○	為家五社百首334	あさがほのはなのしら露いづれをか日かげまつまもしばしたのまむ
132	109	思ふに消えぬ		67	○		古今806	身をうしとおもふにきえぬものなればかくてもへぬるよにこそありけれ
133	109	いつか我が身のと、	○	68			拾玉83	今日知らぬうき世の中の例にはいつか我が身のならむとすらむ
				68参考	未参考		続後撰1084	ながつきのなごりを惜しとひいひていつかわが身の秋にわかれん
134	110	「涙よ、さのみものな思ひそ」		69参考	未参考		続古今1337	うき世をばあられば ばあるにまかせつつ心よいたくものな思ひそ
				70	○	●	詞花258	おもひやれかけひの水の絶えだえになり行くほどの心細さを
135	110	掛け樋の水の音づれも、絶え絶えにのみ			○	●	新千載1455	絶えねただかけひの水の音信よ中中袖はぬるるものゆゑ
					○参考		横笛草子	何とただ懸桶の水のたえだえにおとづれ来ては袖ぬらすらん

番号	頁	あきぎり本文	「と」	福田注	妹尾注	コ	出典	和歌
136	111	末の露、本の雫、後れ先立つ例、生者必滅のことわりなれば		71	○	●	新古今757	するゑのつゆもとのしづくやよのなかのおくれさきだつためしなるらん
137	111	生の松原、生きたる人も		72	○		拾遺1208	けふまではいきの松原いきたれどわが身のうさになげきてぞふる
138	111	昨日今日とは		73	○		古今861	つひにゆくみちとはかねてききしかどきのふけふとはおもはざりしを
139	112	夢の心地せしを…さめやらぬ心地を		75			続拾遺1315	夢ぞとは思ひながらもさめやらぬ心ぞながきまどひなりける
				75			続後拾遺1269	覚めやらぬ夢路に夢をききそへて迷ひのうちになほ迷ふかな
140	112	憂きに堪へせぬ命のつれなさは			未参考		奥儀抄197	思ひいでてとふ言の葉をたれみましうきにたへせぬいのちなりせば
141	114	はかなかりける契りのほどのみ				○	続古今1318	さてもなほはかなかりけるちぎりかなあはれむかしのよこそつらけれ
142	116	山の彼方へとのみ	○	82	○		古今950	み吉野の山のあなたに宿もがな世の憂き時の隠れがにせむ
143	116	定めなき世		83参考		●	夫木15270	さだめなき世のならひこそあはれなれ日をへてまさる野べの卒塔婆に
144	116	主なき宿の		84			拾遺62	浅茅原主なき宿の桜花心やすくや風に散るらん
145	116	朝浄めせぬ		85	○		拾遺1055	とのもりの伴のみやつこ心あらばこの春ばかり朝浄めすな
146	117	「いづくも春の」と言ひながら	○	88未				
					未参考		時広集15	あさがすみいづくもはるの色なれどなほめにかかるみよし野の山
147	117	照りもせず曇りも果てぬ		89	○	●	新古今55	照りもせず曇りもはてぬ春の夜のおぼろ月夜にしくものぞなき
148	118	見えぬ山路のみぞ		90	○		古今955	よのうきめ見えぬ山ぢへいらむにはおもふ人こそほだしなりけれ
149	119	ほのかなりし面影		91参考			風雅981	ほのかなる面影ばかり三日月のわれて思ふと知らせてしがな
150	123	よその軒端に生ひ出で給ふを			未			
151	125	袖の気色もしるからんと			未			
152	126	青葉まじりの遅桜		93	○	●	金葉95	夏山のあを葉まじりのおそ桜初花よりもめづらしきかな
153	126	春の末葉のなど	○	94	未参考		百首歌合建長八年793	さきそめし春の末葉の藤波の心ながくぞ夏にかかれる
154	126	浅緑なる空の気色		95		●	後拾遺907	春霞立ち出でむこともおもほえず浅緑なる空の気色に
155	128	逢ふ瀬もかたき		96参考			新葉772	はかなくぞ人の心にまかせけるいのるにだにもかたきあふせを
					○		新千載1020	恋ひわびぬ逢ふ夜もかたしおく山のいはもとこすげねのみなかれて
156	128	御手洗川の禊は神もうけず		97	○		古今501	恋せじとみたらし河にせしみそぎ神はうけずぞなりにけらしも
157	128	我が身ひとつにや		98			古今193	月見ればちぢにものこそかなしけれ我が身ひとつの秋にはあらねど
158	129	形見とも慰みなまし		100参考			いはでしのぶ206	なでしこをきえにし露のかたみともしのばん人をいかがへだてん
159	130	もの悲しきにも、我が身一人とのみ		101	○		古今193	月見ればちぢにものこそかなしけれ我が身ひとつの秋にはあらねど
160	131	ほかよりは知らせ顔なる空の気色			未参考		殿上歌合承保二年2	とやまなるいはかげ紅葉いろに出でて秋はくれぬとしらせがほなる
161	131	木の葉を誘ふ嵐の音に		102参考	○		玉葉805	たづねずてけふもくれなば紅葉葉をさそふあらしの風や吹きなん
162	131	庭の錦の散り散らず		103参考	○		和泉式部194	散り散らず見る人もなき山里の紅葉は闇の錦なりけり
				103参考			拾玉2587	くれなゐをおろす嵐ときくほどに庭の錦をまたたたむなり
163	131	誘ふ嵐のなきほどなり			○		玉葉805	たづねずてけふもくれなば紅葉葉をさそふあらしの風や吹きなん
164	132	嵐に類ふ木の葉の音につけても			未参考		千載1149	あかつきのあらしにたぐふかねのおとを心のそこにこたへてぞきく
165	133	隈なき月もすさまじかるべきに		104参考			風雅848	うすぐもりをりをりさむくちる雪にいづるともなき月もすさまじ
166	137	袖の玉、光失ひ給へる心地		106			源氏物語葵	
167	139	山の彼方へと思し立たぬ折なく		107	○		古今950	みよしのの山のあなたにやどもがな世のうき時のかくれがにせむ
168	139	逢ふにしも身をもいたづらに代ふる例なるに		108	○		古今615	いのちやはなにぞはつゆのあだ物をあふにしかへばをしからなくに
				108	○		伊勢物語118	思ふには忍ぶることぞ負けにける逢ふにしかへばさもあらばあれ
169	139	つひに谷の埋もれ木にて、さて朽ち果てはんは		109	○		千載651	思へどもいはでの山に年をへてくちやはてなん谷の埋木

凡例
1「あきぎり」作品中にあらわれる順に用例番号を付した。また、「頁」の列に「中世王朝物語全集」の頁を示した。
2「と」は、引用の「と」や「など」を伴なっている場合で、引歌や何らかの章句を引用していることを示す表現がある場合○を付した。
3 福田注は福田百合子氏注釈「中世王朝物語全集」(笠間書院)の注番号を掲げる。参考歌としているものは注番号のあとに「参考」と付す。また、「—を引くか」と注記のある場合は「？」を付した。また『源氏物語』引用の指摘がある場合は、出典の列に右詰めで巻名を示した。
4 妹尾注は妹尾好信氏「『あきぎり』引歌表現考」に掲げてあるものには○を、項目としてあげ引歌未詳としているものには「未」を、参考歌を掲げているものには「参考」をそれぞれ付した。また、明らかな『狭衣』引用との指摘をされている項目には「☆」印を付した。
5「コ」の列には、先行指摘があり、コンピュータの3音8因子以上の抽出結果にあらわれた場合●を付した。また先行注には指摘がない場合は○を付した。引歌認定に疑問の残る場合も含む。

表Ⅱ

番号	全集頁	あきぎり本文40字	ポイント	歌集	歌番号	歌
1	16	は、みをさらぬここちしてこひしきにも、いつならひけるこいのこころそやなと、うちな	9	拾玉集(慈円)	【五四九三】	いかにこはひまなくひとのこ／ひ／しきはい／つ／な／ら／ひ／けるわかこ／こ／ろそも
			9	柳葉和歌集(宗尊親王)	【三四二】	みすしらぬときたにひとのこ／ひ／しきはい／つ／な／ら／ひ／け／るこ／ころなるらむ
2	24	へき。いかなるよにさすらへたまはんすらんと、これのみまことのみちのさはりともなり	8	安撰和歌集	【四〇七】	よしなしやたたいつはりのこ／とのははま／こと／の／み／ち／の／さ／はりなりけり
			8	正覚国師集	【八五】	しるへとてふるきしをりをたのむこそま／こ／と／の／み／ち／の／さ／はりなりけれ
3	30	、ひとりうちゑひし、つねよりもものかなしきゆふへのそらを、つくつくとなかめたまへ	8	建礼門院右京大夫集	【一六七】	つ／く／つ／く／と／な／かめすくしてほしあひの／そ／らをかはらすなかめつるかな
			8	典侍為子集	【三】	まちたえてたたいたつらにつ／く／つ／く／と／な／かめはかりのくれそか／な／しき
4	31	や、むかしのかけもととまらぬに、かはつのこゑはかりそおもかはりせぬ。△△いかかせ	9	増鏡	【四八】	われなからうとみはてぬるみのうへになみたは／か／り／そ／お／も／か／は／り／せぬ
			8	菊葉和歌集	【一六五】	ふるさともみしやむ／か／しのはるは／かりお／も／か／は／り／せぬはなのゆふはえ
5	31	り御むかへまゐれり。これやかきりとおもふにむかしいまのこととりあつめておほしつつ	8	実家集	【四六】	はなをみてこ／れ／や／か／き／り／と／お／もふとものこりのはるのかすはつきせし
			8	六帖詠草(瀘庵)	【一五七一】	またこそとことにはいへとおいぬれはこ／れ／や／か／き／り／と／お／もふわかれち
6	32	すなから、われにもあらすいてたまひぬ。みちすからも、御そてのかわくまなし。御とも	8	小夜衣	【九】	こころに／も／あ／らすへたつるさよころもかさねしそ／て／の／か／わ／くまそなき
7	35	かかりて、よもすからまとろまれたまはす。御こころのうちは、しのふもちすりと、くる	9	続古今和歌集	【九五九】	したにのみし／の／ふ／も／ち／すりくるしきはこ／こ／ろ／の／うちのみたれなりけり
			8	万代和歌集	【一七二五】	そのくにをし／の／ふ／も／ち／す／りとにかくにねかふこ／こ／ろのみたれすもかな
			8	散文奇歌集(俊頼)	【九〇二】	そのくにをし／の／ふ／も／ち／す／りとにかくにねかふこ／こ／ろのみたれすもかな
			9	正治初度百首	【七七四】	したにのみし／の／ふ／も／ち／すりくるしきはこ／こ／ろ／の／うちのみたれなりけり
			9	三百六十番歌合【正治二年】	【六一九】	きみにかくみたれそめぬとしらせはやこ／こ／ろ／の／うちのし／の／ふ／も／ち／すり
			9	三百六十番歌合【正治二年】	【六二〇】	したにのみし／の／ふ／も／ち／すりくるしきはこ／こ／ろ／の／うちのみたれなりけり
			9	袖中抄	【九一八】	きのふみしし／の／ふ／も／ち／すりたれならむこ／こ／ろ／の／うちそかきりしられぬ
			9	春の深山路	【二〇】	いつまてかおもひみたれむひとしれぬこ／こ／ろ／の／うちのし／の／ふ／も／ち／すり
			9	雲葉和歌集	【一〇〇八】	したにのみし／の／ふ／も／ち／すりくるしきはこ／こ／ろ／の／うちのみたれなりけり
			9	題林愚抄	【六一九四】	きみにかくみたれそめぬとしらせはやこ／こ／ろ／の／うちにし／の／ふ／も／ち／すり
			9	頼輔集	【五四】	きみゆゑにおもひみたるとしらせはやこ／こ／ろ／の／うちにし／の／ふ／も／ち／すり
			9	親盛集	【八二】	いはぬまはおもひみたれてすくすかなこ／こ／ろ／の／うちのし／の／ふ／も／ち／すり
			9	歌枕名寄	【六九一七】	きみにかくみたれそめぬとしらせはやこ／こ／ろ／の／うちにし／の／ふ／も／ち／すり
8	39	、なかなかみそめたてまつりてのこころのうちのくるしさも、さこそとおもひつつけられ	10	続千載和歌集	【一一二〇】	いはておもふこ／こ／ろ／の／う／ち／の／く／る／し／さもしらせてのちはなくさみやせむ
			9	新千載和歌集	【一〇八八】	ひとしれすこ／こ／ろ／の／う／ち／の／く／るしきはお／もひしことのたかふなりけり
			9	万代和歌集	【二五五五】	ひとしれすこ／こ／ろ／の／う／ち／の／く／るしきはお／もひしことのたかふなりけり
			10	山家集(西行)	【一二五三】	わかなけくこ／こ／ろ／の／う／ち／の／く／る／し／さもなににたとへてきみにしられむ
			9	山家集(西行)	【一三三〇】	なけかるるこ／こ／ろ／の／う／ち／の／く／る／しさをひとのしらはやきみにかたらむ
			8	寛平御集(宇多天皇)	【一三】	ひとしれすこ／こ／ろ／の／う／ち／の／く／るしきはおも[ふこころ](ヒシコト)のたかふなりけり
			9	隆信集	【八八】	みたるらむこ／こ／ろ／の／う／ち／の／く／る／しさにあらぬむねさへこかれぬるかな
9	43	へわたしたてまつり給ふ。わたりてみ給へは、なにとなくものあはれなり。まつうちなか	8	玉葉和歌集	【一一二八】	な／に／と／な／く／も／の／あ／はれにもみゆるかなかすみやたひのこころなるらむ
			8	長秋詠藻(俊成)	【二〇五】	な／に／と／な／く／も／の／あ／はれにもみゆるかなかすみやたひのこころなるらむ
			10	拾玉集(慈円)	【九三三】	な／に／と／な／く／も／の／あ／は／れ／なりやまさとのにはのあさちのけさのはつゆき
			9	後鳥羽院御集	【八】	な／に／と／な／く／も／の／あ／は／れなるきさらきのあめそほふれるゆふくれのそら
			9	正治初度百首	【九】	な／に／と／な／く／も／の／あ／は／れなるきさらきにあめそほふれるゆふくれのそら
10	43	御みなれは、よそなからたにみたてまつりたまはねとも、みまくほしさにはいさなはれつ	9	古今和歌集	【六二〇】	いたつらにゆきてはきぬるものゆゑにみ／ま／く／ほ／し／さにい／さ／な／は／れつつ
			9	古今和歌六帖	【三〇三五】	いたつらにゆきてはきぬるものゆゑにみ／ま／く／ほ／し／さにい／さ／な／は／れつつ
			8	新明題和歌集	【七六〇】	さくはなのみ／ま／く／ほ／し／さにい／さ／な／はれまたきにはるのやまちくらしつ
			9	定家八代抄	【一一七八】	いたつらにゆきてはきぬるもの故にみ／ま／く／ほ／し／さにい／さ／な／は／れつつ
			9	源氏物語古注釈書引用和歌	【六一六】	いたつらにゆきてはかへるものゆゑにみ／ま／く／ほ／し／さにい／さ／な／は／れつつ
11	46	こちもしたまはす。ちちのやしろをひきかけてちきり給ひしことも、おほしいてらるるに	10	称名院集(公条)	【一五四一】	あつさゆみち／ち／の／や／し／ろ／を／ひ／き／か／けて矢のことくなるみちをいのらむ
			10	耕雲千首	【六五八】	いささらはち／ち／の／や／し／ろ／を／ひ／き／か／けてたのむはかりにひとをうらみむ
12	47	のみおほしこかるれと、こころのうちをしるひとなし。△きたのかたへは、いととかきた	9	拾遺愚草(定家)	【六一】	いかにせむそてのしからみかけそむるこ／こ／ろ／の／う／ち／を／し／る／ひとそなき
			9	正治初度百首	【二〇五五】	よもすからつきをなかむるうたたねのこ／こ／ろ／の／う／ち／を／し／る／ひともかな
			9	物語二百番歌合	【三二】	いかにせむいはぬいろなるはななれはこ／こ／ろ／の／う／ち／を／し／る／ひともなし
			9	風葉和歌集	【一〇六五】	いかにせむいはぬいろなるはななれはこ／こ／ろ／の／う／ち／を／し／る／ひとそなき
			9	後鳥羽院定家知家入選撰歌(宋良)	【八一】	おもふこといはてこのよにありふともこ／こ／ろ／の／う／ち／を／し／る／ひともかな
13	49	たるさいしやうききつけたてまつり、いまそかへにそむけるともしひかかけなとして、も	8	拾玉集(慈円)	【三六七一】	わかひよしたれか／かけよとてらすらむか／へ／に／そ／む／けるのりのと／も／しひ
			9	宝物集	【一九九】	ものおもへはか／へ／に／そ／む／け／る／と／も／しひのきえかへりてそあかしかねつる
			9	紫禁和歌集(順徳院)	【八九二】	しろたへのか／へ／に／そ／む／け／る／と／も／しひのかけかすかなるありあけのそら

番号	全集頁	あきぎり本文40字	ポイント	歌集	歌番号	歌
14	55	きにはのをもは、あるにもあらぬなかにも、をはなかもとのおもひくさなとは、なをうち	10	新古今和歌集	【　六二四】	のへみれはを／は／な／か／も／と／の／お／も／ひ／くさかれゆくふゆになりそしにける
			10	新古今和歌集	【一三四〇】	とへかしなを／は／な／か／も／と／の／お／も／ひ／くさしをるるのへのつゆはいかにと
			8	新後撰和歌集	【　四〇一】	なきあかすのはらのむしの／お／も／ひ／くさを／は／な／か／もとやよさむなるらむ
			10	続後拾遺和歌集	【　六三一】	みちの辺のを／は／な／か／も／と／の／お／も／ひ／くさいまさらなにのものかおもはむ
			8	新撰和歌六帖	【一二六八】	ことしのみしけるものかはお／も／ひ／くさを／は／な／か／も／とのあきのこころを
			10	夫木和歌抄	【一三四九五	みちのへのを／は／な／か／も／と／の／お／も／ひ／くさいまさらなにかものおもふへき
			8	拾玉集（慈円）	【　三五一】	をみなへしなまめくのへの／お／も／ひ／くさを／は／な／か／もとにしけりぬるかな
			8	壬二集（家隆）	【二七八九】	ふゆきてもを／は／な／か／も／とのくさはなほかれてやひと／の／お／もひしるらむ
			10	俊成卿女集	【　五二】	くちはつるを／は／な／か／も／と／の／お／も／ひ／くさはかなのの へのつゆのよすかや
			10	宝治百首	【二〇八一】	しもかれのを／は／な／か／も／と／の／お／も／ひ／くさむすひかへてしあとものこらす
			9	延文百首	【二四五九】	う忽おきし小は／な／か／も／と／の／お／も／ひ／くさひとめなからもかれにけるかな
			8	為尹千首	【　六七九】	ちきらすよつきはいるのの／お／も／ひ／くさを／は／な／か／もとにつゆかかれとは
			10	千五百番歌合	【二四九五】	とへかしなを／は／な／か／も／と／の／お／も／ひ／くさしをるるのへのつゆはいかにと
			10	春日若宮社歌合（寛元四年十二月）	【　三四】	ほにいつるを／は／な／か／も／と／の／お／も／ひ／くさたかこころよりたねをまきけむ
			10	桐火桶	【　二二】	みちのへのを／は／な／か／も／と／の／お／も／ひ／くさいまさらになとものおもふへき
			8	楢葉和歌集	【　二六一】	うつらなくを／は／な／か／も／と／の／おもくさお／もひしよりもぬるるそてかな
			8	拾遺風体和歌集	【　九七】	なきあかすのもせのむしの／お／も／ひ／くさを／は／な／か／もとやよさむなるらむ
			8	松花和歌集	【　一五五】	いつまてかしたにしのはむお／も／ひ／くさを／は／な／か／も／とのつゆのふかさを
			10	為忠集	【　一八四】	しをれぬるを／は／な／か／も／と／の／お／も／ひ／くさはかなくきえむのへのつゆとそ
			10	隣女集（雅有）	【一四三五】	かせふけはを／は／な／か／も／と／の／お／も／ひ／くさかたなひきなるそてのつゆかな
			11	草根集（正徹）	【七八五三】	ひとこころを／は／な／か／も／と／の／お／もひに／も／あ／らぬちきりのす忽そかれゆく
			8	松下集（正広）	【　五〇三】	お／も／ひ／くさを／は／な／か／も／とのをみなへしつゆもへたてぬちきりをそみる
			8	拾塵集（政弘）	【　五八三】	お／も／ひ／くさいつかむすはむやまとりのを／は／な／か／も／とのなかきちきりに
			8	卑懐集（基綱）	【　四四八】	みかりのやかくれぬとりの／お／も／ひ／くさを／は／な／か／もともしもにかれつつ
			9	雪玉集（実隆）	【三〇〇八】	しもかれはなにをよすかの／お／も／ひ／くさあ／る／に／も／あ／らぬみきはかくれに
			8	衆妙集（幽斎）	【　四二六】	しもかれをたれかあはれとお／も／ひ／くさを／は／な／か／も／とのあきをこひつつ
			8	為家一夜百首	【　七八】	お／も／ひ／くさを／は／な／か／も／とのつゆしけみほにいててこひのなにやしられむ
			8	頓阿百首A	【　七二】	なひくともを／は／な／か／も／と／の／おもく／さなほしたもえのいろやみえまし
			10	定家八代抄	【　五一九】	のへみれはを／は／な／か／も／と／の／お／も／ひ／くさかれゆくふゆになりそしにける
			10	定家八代抄	【一二九〇】	とへかしなを／は／な／か／も／と／の／お／も／ひ／くさしをるるのへのつゆはいかにと
			10	朗詠題詩歌	【　八六】	あきふかきを／は／な／か／も／と／の／お／も／ひ／くさはす忽のつゆやしもとなるらむ
			10	色葉和難集	【　二五五】	みちのへのを／は／な／か／も／と／の／お／も／ひ／くさいまさらなにのものかおもはむ
			10	歌林良材	【　六三一】	みちのへのを／は／な／か／も／と／の／お／も／ひ／くさいまさらになそものはおもはむ
			10	歌林良材	【　六三三】	しもむすふを／は／な／か／も／と／の／お／も／ひ／くさきえなむのちやいろに出つへき
15	57	ほえ給ふ。△たいなこんは、つきひにそへて、ひとやりならぬおもひもはれやらすのみ、	8	六百番歌合	【　六一一】	こひそむるこころのそこをたつぬれはひ／と／や／り／な／ら／ぬ／お／もひなりけり
16	58	にとなくとしもかへりぬれは、たちかはるはるのけしきも、いとかなし。よものやまへか	10	讃岐守顕季家歌合	【　一】	た／ち／か／は／る／は／るのしるしにみるものはよ／も／の／や／まへのかすみなりけり
			10	新和歌集	【　二】	た／ち／か／は／る／は／る／の／け／し／きもあらはれてみねのあさひのかけそのとけき
			10	風に紅葉	【　八九】	た／ち／か／は／る／は／る／の／け／し／きもかひなきはきみをへたつるかすみなりけり
17	60	るあたりにて、かけはなれたらは、いかゞせん。さしもちきりしことのはを何としのふら	9	万代和歌集	【二三八五】	わすれしとともにいふきのさ／しもくささし／も／ち／き／り／し／こ／と／のはそかし
			9	菊葉和歌集	【一二三四】	おもひきやさ／し／も／ち／き／り／し／こ／と／のはのしもをもまたてかれはてむとは
			9	菊葉和歌集	【一三八七】	偽のあるよをいまそおもひしるさ／し／も／ち／き／り／し／こ／と／のはもゆめ
			9	新明題和歌集	【三三四九】	おもひかねさ／し／も／ち／き／り／し／こ／と／のはもゆめてふものはうしやあたなる
			10	新明題和歌集	【三八七九】	わするなとさ／し／も／ち／き／り／し／こ／と／の／はをたかたまくらのゆめになすらむ
			8	亜槐集（雅親）	【　八七七】	し／のふそといひてち／き／り／し／こ／と／の／はをふくるにつけてたのむよはかな
18	77	おもひしに、いかなるむくいにて、つゆのいのちのきえやらて、またうきをもひせんとす	8	続後撰和歌集	【一一一三】	お／もひきやつ／ゆ／の／い／の／ち／の／きえぬまにまたもくもゐのつきをみむとは
			10	続拾遺和歌集	【一二九〇】	けふまてにつ／ゆ／の／い／の／ち／の／き／え／や／らてみのりのはなとみるそかひなき
			10	信生法師集	【　四四】	わかれちにつ／ゆ／の／い／の／ち／の／き／え／や／らてとをと三としのあきにあひぬる
			8	長綱集	【　二八七】	き／え／や／らてつ／ゆ／の／い／の／ちのあるかうへにうきもつらきもひとのとかかは
19	78	そわかこころはしりぬらんと、くものはたてのものおもはしさは、さめやるかたなし。ひ	8	松下集（正広）	【　三五一】	ゆふくれのく／も／の／は／た／てのほとときすたれも／の／おもふこ／ころわくらむ

番号	全集頁	あきぎり本文40字	ポイント	歌集	歌番号	歌
20	79	たして、御かほなんと、なみたにあらはれにけりとみゆるに、なにことをかはかりおほし	10	太皇太后宮寂平経盛朝臣家歌合	【一〇七】	いかにせむこころは／かりはしつむれとそてはな／み／た／に／あ／ら／は／れ／に／けり
			8	六百番歌合	【七二三】	ほしかねしたもとははやくくちはててこひそな／み／た／に／あ／ら／は／れ／にける
			8	題林愚抄	【六三八五】	ほしかねしたもとははやくくちはててこひそな／み／た／に／あ／ら／は／れ／にける
			9	他阿上人集	【六三八】	こひすてふこころのうちはしのふにもたへぬな／み／た／に／あ／ら／は／れ／に／けり
21	80	こほれたまふもあやしきに、御そてをさへとらへて、そてのしからみせきかねたり。△を	8	続後撰和歌集	【一五六】	はるくるるゐて／の／し／か／ら／み／せ／き／かねてゆくせにうつるやまふきのはな
			9	新千載和歌集	【一〇八二】	なみたかはそ／て／の／し／か／ら／み／せ／き／かねてやとれるつきもかけそなかるる
			9	新葉和歌集	【七〇三】	なみたかはそ／て／の／し／か／ら／み／せ／き／かねはもらさむさきにみをやしつめむ
			9	南朝五百番歌合	【六三六】	なみたかはそ／て／の／し／か／ら／み／せ／き／かねはもらさぬさきにみをやしつめむ
			8	新明題和歌集	【三一五七】	おもひあまるこころやみえむなみたかはそ／て／の／し／か／ら／み／せ／きかへすとも
			8	歌枕名寄	【八五九】	はるくるるゐて／の／し／か／ら／み／せ／き／かねてゆくせにうつるやまふきのはな
22	83	んはなにかしかをろかならんとおもふも、こころのうちは「しのふもちすり」とみえたり	9	続古今和歌集	【九五九】	したにのみし／の／ふ／も／ち／すりくるしきはこ／こ／ろ／の／うちのみたれなりけり
			9	正治初度百首	【七七四】	したにのみし／の／ふ／も／ち／すりくるしきはこ／こ／ろ／の／うちのみたれなりけり
			9	三百六十番歌合【正治二年】	【六一九】	きみにかくみたれそめぬとしらせはやこ／こ／ろ／の／うちのし／の／ふ／も／ち／すり
			9	三百六十番歌合【正治二年】	【六二〇】	したにのみし／の／ふ／も／ち／すりくるしきはこ／こ／ろ／の／うちのみたれなりけり
			9	袖中抄	【九一八】	きのふみしし／の／ふ／も／ち／すりたれならむこ／こ／ろ／の／うちそかきりしられぬ
			9	春の深山路	【二〇】	いつまてかおもひみたれむひとしれぬこ／こ／ろ／の／うちのし／の／ふ／も／ち／すり
			9	雲葉和歌集	【一〇〇八】	したにのみし／の／ふ／も／ち／すりくるしきはこ／こ／ろ／の／うちのみたれなりけり
			9	題林愚抄	【六一九四】	きみにかくみたれそめぬとしらせはやこ／こ／ろ／の／うちにし／の／ふ／も／ち／すり
			9	頼輔集	【五四】	きみゆゑにおもひみたるとしらせはやこ／こ／ろ／の／うちにし／の／ふ／も／ち／すり
			9	親盛集	【八二】	いはぬまはおもひみたれてすくすかなこ／こ／ろ／の／うちのし／の／ふ／も／ち／すり
			9	歌枕名寄	【六九一七】	きみにかくみたれそめぬとしらせはやこ／こ／ろ／の／うちにし／の／ふ／も／ち／すり
23	90	たかたにつけても、「うかりけるみのちきりはいかなるさきのよのむくひなりけん」とま	8	続後撰和歌集	【八六二】	あはれまたい／か／なるよよ／の／む／くひにてうきに／つ／け／てもひとをこふらむ
			8	秋篠月清集（良経）	【六九四】	さ／き／の／よ／の／むくいのほとのかなしきをみるに／つ／け／てもつみやそふらむ
			8	嘉元百首	【八六二】	う／か／り／け／る／み／の／ち／きりかなひとしれすおもふこころのさのみむなしき
			8	嘉元百首	【一四六一】	ひとのためつれなか／り／ける／さ／き／の／よ／の／むくいやいまのなけきともなる
			8	新和歌集	【八七四】	うけかたきひととなり／ける／さ／き／の／よのみには／い／か／なるこころありけむ
			8	実材母集	【六三五】	さ／き／の／よ／の／む／くひもかなしい／かなれはうらみをむすふち／きりなるらむ
			8	澄覚法親王集	【二六六】	う／か／り／けるつみの／む／くひとおもふにそさ／き／のよかけ／てものはかなしき
			8	草根集（正徹）	【六五三七】	さ／き／の／よの／ち／き／りはありのすさみにやわかおもふひとにわかう／か／りけむ
			8	雪玉集（実隆）	【三七五一】	う／か／り／ける／さ／きの／む／くひをみのうえにこの／よのゆめやまさしかるらむ
24	90	りはいかなるさきのよのむくひなりけん」とまて、おほしみたるるにも、およひなきくも	8	新和歌集	【八七四】	うけかたきひととな／りける／さ／き／の／よのみには／い／か／なるこころありけむ
			8	続門葉和歌集	【八〇二】	さ／き／の／よ／の／む／くひと／まてはしりなからのちをおもはぬみそおろか／なる
25	99	めかしたまはさらん。およひなきくものかけはしとうけ給りしより、こよひまてのなけき	10	小夜衣	【六五】	お／よ／ひ／な／き／く／も／の／か／け／はしふみみねとなみたうききにそてくちにけり
26	99	んへりぬへし。いまは、うらみてもなきてもかひなきみなれは、もしひまあらはこのふみ	8	玉葉和歌集	【一七九九】	う／ら／み／て／も／か／ひ／なきはてのい／まはたたうきにまかせてみるそかなしき
27	100	らん事も、これやかきりにてあらんすらん。かゝるうきよにならへても、いまはかひな	8	続門葉和歌集	【八五一】	たまのをのかかる／う／き／よ／に／な／か／ら／へてよそのあはれをいつまてかみむ
28	101	おもかけ、さしむかひたりしよなよなのつきかけは、こひしくおもひいてられて、み給へ	8	歌合【嘉元三年三月】	【二二】	よ／な／よ／な／の／つきを形みとむかへともみしよにかへるお／も／か／けはなし
			10	建武三年住吉社法楽和歌	【四八】	お／も／ひ／いててなほしのへとやうきひとのお／も／かけみするよ／な／よ／な／の／つき
29	107	ぬを」とて、いとあはれけなる御けしきなれは、「ひとのとふまてなりにけるを、はつか	9	続後拾遺和歌集	【六八七】	いまははやひ／と／の／と／ふ／ま／て／な／り／にけりおもふあまりのゆふくれのそら
			10	柳葉和歌集（宗尊親王）	【一二六】	しのひにとおもひしなかのあやにくにひ／と／の／と／ふ／ま／て／な／り／に／けるかな
30	109	のしるしもなし。たたあさかほのはなのつゆ、ひかけまたぬほとにて、きえはてたまひぬ	9	新古今和歌集	【一九一七】	なにかおもふなにとかなけくよのなかはた／た／あ／さ／か／ほ／の／は／なのうへの／つゆ
			8	後鳥羽院御集	【七三四】	ゆめのよによそへつつみるあ／さ／か／ほ／の／は／な／の／つゆにそそてはぬれける
			9	袋草紙	【二一九】	なにかおもふなにかはなけくよのなかはた／た／あ／さ／か／ほ／の／は／なのうえの／つゆ
			8	楢葉和歌集	【二二四】	あ／さ／か／ほ／の／は／なのまかきはきりこめてひ／か／けまつまのさかりたにこなき
			8	霞関集	【四一二】	はかくれにのこるとみるもかけろふのゆふか／け／ま／たぬあ／さ／か／ほ／の／はな
			8	政範集	【三八三】	うきよをはた／た／あ／さ／か／ほ／の／は／なのうへにしはしやとかるつゆとこそみれ
			8	為家五社百首	【三三四】	あ／さ／か／ほ／の／は／なのしらつゆいつれをかひ／か／けまつまもしはしたのまむ
31	114	給ひても、はかなかりけるちきりのほとのみ、かなしとおほしつゞくる。むかしのうさは	8	新勅撰和歌集	【九七九】	あはれあはれは／か／な／か／り／け／る／ち／きりかなたたうたたねのはるのよのゆめ
			10	続古今和歌集	【一三一八】	さてもなほは／か／な／か／り／け／る／ち／きりかなあはれむ／か／しのよこそつらけれ
			10	万代和歌集	【二七三五】	さてもなほは／か／な／か／り／け／る／ち／きりかなあはれむ／か／しのよこそつらけれ
			8	壬二集（家隆）	【一一〇六】	まちえてもは／か／な／か／り／け／る／ち／きりかな憑めもはてぬなつのみしかよ
			8	千五百番歌合	【二四三九】	あふとみておもひあはせぬゆめにさへは／か／な／か／り／け／る／ち／きりしれとや
			8	千五百番歌合	【二六八四】	あはれあはれは／か／な／か／り／け／る／ち／きりかなたたうたたねのはるのよのゆめ
			8	嘉喜門院集	【八七】	うか／り／け／る／ち／き／り／の／ほともにしききのちつかののちそおもひしりぬる

また、次のような例はいかがだろう。用例17「さしもちぎりしことのは」、20「なみだにあらはれにけり」、21「そでのしからみせきかね」、31「はかなかりけるちぎり」。また、仏教語に由来する用例2「まことのみちのさはり」、23「うかりけるみのちきり」、24「さきのよのむくひ」など。これらは引歌表現と認定するには躊躇するが、さりとて、全く歌ことばとは関係ないとも言い切れないもののように思われる。同じ言葉続きが複数歌に見える。加えて、物語本文の前後の文章にも語調のよい歌ことばが連続して用いられるような場面が多い。また、和歌そのものは中世以後の歌が多く、なかには非常に時代の下る歌も含まれる。厳密な意味での引歌表現は、むしろ従来の方法で探すことができるわけであるから、和歌的表現の傾向を確認できる点にこそコンピュータの利点を認めたい。

二、『あきぎり』と『源氏物語』本文との比較結果

前稿においては、『あきぎり』本文と『狭衣物語』本文との比較結果を報告した。かなり明確な物語取りが認められ、それが抽出される結果となったのである。このたびは『源氏物語』本文との比較結果について述べたい。

連続する5音一致が5ポイント以上の場合を抽出すると、4973件のデータが掲出された。しかしながら、このなかでは13ポイントが最も高い値で、10ポイント以上は27件とわずかな件数である。『源氏物語』という膨大なデータ量との比較においても、類似表現と認められる文章表現はごく限られたものだということになる。しかも、『狭衣』の場合に見えたような、数行に渡る明らかな場面取りはない。『源氏物語』本文との比較結果は、概ね以下の四つの場合に分類することができそうである。

① 官職名など一語が長い固有名詞や用例の多い敬語が一致する場合

さいしやうのちうしやう　／　ひやうふきやうのみやと　／

みかとよりはしめたてまつりて　／　（形容詞）くみたてまつりたまひて

② 類型的表現の範疇と認められる場合

いみしくこころほそけなるに　／　さすかにこころくるしく　／

あさましく…いかなることそ　／

③ 類型的表現の範疇だと思われるが用例が一例のみである場合

（さしぬき）けしきはかりひきあけ　／　おもかけこころにかかりて　／

…しおもかけもわすれかたく　／　あけくれのかしつきくさ　／

なかめかちにのみおはします　／　つつむへきにはあらねと（異文）

④ 引歌表現が重なる場合で、慣用句的表現と認められる場合。

ちちのやしろをひきかけて（1例）／たれもちとせのまつならぬよ（1例）／
とりかへさまほしくおほし（5例）／いかなるむかしのちきりにて（2例）／
ひとやりならすこころほそく（1例）／のちのよのさまたけにもやと（1例）
なきひとのかけたにみえ（す）〔源氏作中和歌〕

ここで注目できるのは③④の場合であろう。③のうち「おもかげこころにかかりて」などは、助詞が入ったり入らなかったりで変わってきそうでもあるが、ただ一例であるという点ではひとまず注目できる。また④は、先の和歌との比較結果と見比べることにより、先行物語から引歌表現ごと引用している場合なのかどうか、また、慣用的表現となり得ているかどうかの見極めができるのではないかと思われる。

おわりに

以上、このたびは、（1）物語本文と「新編国歌大観」所収和歌との比較結果を踏まえての引歌表現一覧、（2）物語本文と『源氏物語』本文との比較結果、を報告した。先行研究によって、本作の引歌表現はほぼすべてを指摘されているが、そのなかにも、慣用的表現となり得ている場合があることや、従来の方法では目につかず引歌と認定することには躊躇される場合でも二句以上の歌句が同じ歌が存することが確認できた。また、物語本文相互比較では、『狭衣物語』と『源氏物語』とで明らかに類似の様相が異なることが確認でき、むしろ、『源氏物語』との比較結果によって、類型的表現なのか否かの見極めに資するデータが掲出できたのではないかと思う。今後、中世物語相互比較を組み合わせることで、固有の表現か類型的表現かの見定めや、引歌表現が慣用的表現になっていく過程の確認に有効に機能するのではないかと期待する。

その点において、コンピュータによる類似表現抽出は研究材料提供のひとつのあり方であると考えている。先行研究における成立に関する推定の方向性を補強する、あるいはその逆の、材料提供である。従来の指摘事項に少し加えるだけのことではあるが、ある一首を決め手に成立年代を見定めるより、ゆるやかに大雑把にではあっても、表現の傾向をたどることの確実さというものがあるのではないか。『あきぎり』の場合は、やはり南北朝期の和歌までを視野に入れるべきではないかと思われる。

＊　この報告は若手研究（B）「中世王朝物語の引用和歌典拠総覧作成とテキスト処理による物語内引歌表現検索の研究」による研究成果の一部である。

注

（1）拙稿、梅光学院大学『論集』第43号（2010）参照。

（2）文字列比較の方法については、拙著『文系のための情報処理入門』（中村康夫共著・和泉書院 2008）において、2音一因子方式について解説し、類歌検索のプログラムを紹介した。このたびの方法は、これを応用したものである。連続する音数を3音、4音、5音に増やすなど、プログラムを書き換えて実験を繰り返した結果である。

（3）市古貞次・三角洋一氏編『鎌倉時代物語集成　第一巻』（笠間書院　1988）

（4）福田百合子氏校訂訳『あきぎり　浅茅が露』（笠間書院　中世王朝物語全集1　1999）

（5）表Ⅰ中に引用した「福田注」の欄については、注（3）を参照した。また「妹尾注」の欄は、妹尾好信氏「『あきぎり』引歌表現考」（『広島大学文学部紀要』　第55巻　1995）による。なお、妹尾氏論中に、辛島正雄氏の先行論（「擬古物語とお伽草子の間―新出『あきぎり』物語をめぐって―」（『文学』56・1　1988））により補足を加えた場合を含む。